

【研究ノート】

## 「人間関係」の研究ノート

——学生は子どもの人間関係をどのように把握しているか——

原 田 明 美

Research Note of Lesson “Ninngennkankei”

—How Does the Student Grasp the Human Relation of the Child?—

Akemi HARADA

### はじめに

筆者は保育内容指導法で「人間関係」を担当している。この授業では人間関係における自分の存在を意識し、自分の人間関係を振り返り、人間関係の大切さを学び、今後保育職に就いた時の内容・技術や方法を教えている。

2018年度より、改定「幼稚園教育要領・保育所保育指針・幼保連携型認定こども園保育・教育要領」が実践されている。改定の大きな一つに、就学までに育みたい3つの資質・能力「知識及び技能の基礎」「思考力、判断力、表現力等の基礎」「学びに向かう力」を打ち出している。そして、就学までに育てほしい姿を10の姿として出している。これはあくまでも到達目標ではないとしながら、年長児の担任は小学校への要録に書く基準としても出されているので、毎日の保育の中でどのように意識し、指導案に盛り込むかが求められていると言ってよい。特に、10の姿の内、「自立心」「協同性」「道徳性・規範意識の芽生え」「社会生活との関わり」の4項目が「5領域」の「人間関係」に関する項目である。「人間関係」が重視されていると言ってよい。「人間関係」の授業の中で、学生の子どもの理解がどの程度進み、子どもの「人間関係」をどのように把握しているか、就学までに育てほしい10のうちの4つの姿を学生はどのように理解し実践する力を養うかが求められる。そして保育者としてどんな力を育てると良いかを考察する。

また、学習指導要領の改定で「主体的で対話的な深い学び」が打ち出されている。この「主体的」な学びを保育の中でどのように進めていくのかを「授業」と関連させて検討する。

### I章 子どもの「人間関係」について学生の理解について

学生は日頃子どもに接する機会はないが、実習の経験などで子どもを観察し、以下のような

子どもの姿を発見している。

**0歳児：**私がじっと見続けると、赤ちゃんもこちらを見る、私が移動すると目で追いかける。年上の子に興味を持つ。様々な玩具に興味を持つ。保育者のひざの上に座り離れない。なんでも触ってみたい気持ちがある。言葉で伝えられないので泣いたり叩いたりする。隠したものを急に出すと驚き喜ぶ。泣いて状況を伝えることが出来る(お腹が空いた等)。楽しいと思ったことを何度も行う。玩具や壁に隠れていないいいないぼーをしてキャッキヤと喜ぶ。窓から外の車をじーと見て、指をさし「ぶーぶー」と伝えようとしていた。お日様を見て指をさし「あったかい」気持ちを伝えようとしていた。友達玩具に興味を持つとすぐ取ってしまう姿があった。床を叩いて音を出し嬉しそう。実習生を不思議そうに見て泣き出す子もいる。動物の絵本が好きでいつも同じウサギのページを見ていて「好きなの」と聞くと「ぴょん」と言って自分の耳を触る。人見知りする。「ア」「ウ」とよく言って指さして伝えようとする。保育者が見えないと泣き出す。目的のおもちゃに向かって一直線にずりばいやはいはいをする。保育者の様子をよく見て、ものを投げる、拾う、握るなどの行為をまねる。保育者との信頼関係ができていてトイレに促す時も実習生よりスムーズに行く。保育者の膝の上で何か動作するごとに保育者の顔を確認していた。見て触れて感じて聞いている。喃語や指さして自分の気持ちを伝えようとする。保育者の手を引っ張り気持ちを伝えようとする。体で触れ合う遊びが好き。保育者が笑いかけるとその笑顔を真似して一緒に笑っていた。何回同じことをしても笑う。感情が豊かで言葉が話せなくても気持ちが分かった。「だだだ、ばばば」など濁音の音をよく発していた。特定の保育者じゃないと泣き止まない。子どもが好きな玩具(スプーン・ボール)を渡して、「ぼーい」と言葉をかけると玩具を投げる、その時スプーンやボールの気持ちになりきって「うわー」などオーバーリアクションすると大爆笑して何回も手を出して「もう1回」とねだる。○○君どこかなと、探す真似をすると、隠れた気持ちになるのか、「見つけた」と言う喜び、大きな表現をすると喜ぶ。

学生は、0歳の子どもは、何にでも興味や関心を持ち、観察し、そして積極的に模倣することで力を身に付け、また声も出し、意思表示をすることなどを0歳児の子どもの姿を通して観察している。改めて、そのような子どもの姿がでる前提条件として、子どもと保育者との信頼関係が築かれているため、子どもは安心して思いを出し、行動で表現していることが分かる。

**1歳児：**保育者の真似をして手遊びや遊びを楽しむ・興味ないことには関心を示さないが、興味を持てば全力でやる。「貸して」と言ったら渡そうとするが友達に譲ることは出来ない。母親の後追いをする。すぐに保育者に助けを求める。自分のうれしかったことを一生懸命伝えようとする。自分が欲しいものは奪ってしまう。興味があるものに突っ込む。実習に入ると「不安そうな悲しそうな表情」の子と、興味を持って近づいてくる子がいた。まてまてと追いかけられると楽しそうに逃げ回る。玩具を取られると囁む。自分の欲求を言葉や仕草で

伝えようとする<sup>1</sup>。リズムでは同じ動きを繰り返すだけでなく手の動かし方を工夫したりする<sup>2</sup>。「やって」「いやだ」を言う。膝の上の子をくすぐると「きゃー」と言って逃げていくがすぐに戻ってきて「やって」という。「ロッカーの中に入らないで」と言われても楽しんで入ってしまう。友達と一緒に遊ぼうとしていた。実習生に「誰？」と聞く。友達がやっていることを見て自分もやりたくなりトラブルになる。子どもの話す語彙量や発音が下手で伝わらないが保育者はキーワードから子どもの気持ちを知り代弁している。友達に近づくと一緒に遊ばず隣で一人遊びをする。給食時一人の子が机を叩くとみんなが真似をして叩き始める。給食の野菜を保育者に問いかける。おもちゃで作ったものを何かに例えて遊ぶ。歩くのが好き<sup>3</sup>。ピンクのおもちゃが欲しくて泣いていたが保育者に説明されて納得していた。同じ人形にこだわりがあり、ずっと持ち歩いていたが実習生に渡して一緒に遊んだりしていた。自由遊びで一人が床に寝転がっていて、保育者も隣で寝て「どんぐり」をうたって転がっていると、他の子もやりたがってきて一緒に転がっていた<sup>4</sup>。自分より年下だとわかると保育者の目を盗んで押ししたり叩いたりしていた<sup>5</sup>。「○○ちゃんね、～、～」と止めるまで、永遠に話し続ける。お気に入りの絵本を持ってきてお気に入りのページを何度も開いていた<sup>6</sup>。一人の子の遊びを他児が真似をしてどんどん広がる（引き出しからオムツを出す）。

学生の観察で、下線にあるように、1歳児になると自分の要求を表現し（下線1・下線2）、工夫する姿が見られる。1歳児はじっとしていることが苦手で、下線3のように走らないでと言っても走ってしまう、何事にも探索しようとする行動力積極性が感じられる、しかしそれを子どもの姿・要求と受け止められないと多動と評価し、じっとしていない、集中力が無い、指示が聞けないとマイナスの行動と受け止め、指示や禁止の言葉が多くなることになる。子どもの理解が必要である。下線4では寝転がっている子どもを保育者が真似ることで他の子どもたちが真似しようとする。ここには子ども理解がある保育者によって子どもの行動がマイナスと評価されず、一緒に楽しむ時間となった。子どもに居心地の良い空間になっている。下線6では繰り返しを好む子どもの姿が観察されている。このようにして子どもは成長する。保育者は気が済むまで、満足するまで遊びこむ時間の保障をしたい。

**2歳児：**玩具を取り合い、取られて泣く。噛みつく（「噛んだら嫌だ」と言うと笑う、「噛むならあっち行く」と言うと泣く…構って欲しい気持ちがある）。・すぐに物を投げる。・他の子の真似をする。他の子に興味を持つ。自分でやりたがる。・自分の気持ちが上手く伝えられず手が出てしまう<sup>1</sup>。自分の好きな遊びを一人で楽しむ。子ども同士の意思疎通が出来ていない。トラブルを子どもだけで解決できない。片付けが出来ない。話を聞いてほしくてたまらない。友だちの物を取り上げ自分の物と主張する<sup>2</sup>。オムツをはこうとしない子に保育者が何か描いてあげようかと言うと「バイキンマン」と答え、嬉しそうにオムツをはく<sup>3</sup>。自分の言葉で保育者に一生懸命説明しようとする。何を言っても「嫌」という子がいる<sup>4</sup>。行きたくなくて、遊びを終わらせたくなくて寝転がってだだをこねる<sup>5</sup>。先生は何を言って

も嫌という事を知っていたので、「先におやつ食べるよ、後で来てね」というと言っていた。しばらくすると自分で椅子に座りおやつを食べていた<sup>6</sup>。先生との結びつきが強く「〇〇先生じゃないと寝ない」「…ご飯食べない」という<sup>7</sup>。「だって…」「〇〇ちゃんが…(自分は悪くない)」と言い訳を言っている<sup>8</sup>。先生が怒った顔をすると急にしおらしくなって「ごめんなさい」という。思いを伝えるときうまく言葉で言えない。自分がピンチになると保育者を求める。やっちゃいけないことが分かってきていけないことをしたとき、しょんぼりしたり陰に隠れたり静かになったりする<sup>9</sup>。施設実習で嘸みつく子に保育者が叱っていて私は叱るだけでいいのかと考えた<sup>10</sup>。絵本を読んでも最後まで読まずに行ってしまう子が多かった<sup>11</sup>。給食時、隣の子に「〇〇ちゃん、おいしいね」と名前を言って顔を見合わせていた。子どもが手を引っ張り砂場で遊びたそう、「一緒にやりたいの」と聞くとうなずく。他の子に「〇〇ちゃん一緒に遊びたいんだって」というと、他の子は黙々と山を作っている。実習生は離れて見守っていると、その子も何もしゃべらないけど山づくりに加わっていた。一緒にやりたい気持ちが叶ったと思った<sup>12</sup>。着脱など何でも自分でやりたがりうまくできなくても保育者は手を出さず見守っていた<sup>13</sup>。おもちゃを取られると「私が使っていた」と言ってにらみ合いになった<sup>14</sup>。友達が転ぶと「大丈夫？」と声をかけていた。必死に話そうと頑張る姿がある。友達と一緒にいたい、一緒に寝たい、一緒にトイレに行きたいという姿があった<sup>15</sup>。ブロックで「レンジャーショー」を一人で何役もやりながら、役になりきって一人で遊んでいる<sup>16</sup>。0歳の子には泣いているとどうして泣いているのかなと考える姿勢がある。褒められること好む。あわぶくたったの遊びで、「トントントン何の音？」のやり取りが楽しくて「お化けの音…キヤー」までいかなかった。お昼寝の時、子ども同士でとんとんしあっていた。先生も早く寝なさいではなく、楽しく眠りにつけられるようにお話をしたりしていた<sup>17</sup>。保育者が「朝の準備してねー」というと「いやだー」という子が多いが、「誰が一番早いかな」というとウソのように素早く動いていた。「見て、見て」と自己主張をたくさんしていた。先生は子どもの姿を認めていた<sup>18</sup>。一緒に遊びたくても「遊ぼ」が言えず、後を追いかけている。こだわりが強く決まったキャラクターのおむつしか、はかないので保育者はその子が寝てから替えていた<sup>19</sup>。いつもは友達が使っているおもちゃをとってしまうけど、その日は「貸して」が言えて保育者が大きな拍手を送っていた<sup>20</sup>。みんなと同じ行動をしたくない子がいる(トイレなど)<sup>21</sup>。自分でやりたい気持ちとできないときで揺れ動いている。(いつもボタンはめをやってもらっていたが、ある日突然自分でやるという、手伝いを拒否した。でもできず泣き出す。実習生が2つは先生がやるから2つは〇〇ちゃんがやる?という自分で2つでき、嬉しそう)<sup>22</sup>。実習生の話は聞こうとしないが、担任の話は聞こうとする姿がみられ愛着の強さを感じた<sup>23</sup>。自分ではできないことも自分でしたいという。「イヤ!」ばかり言う子がいたので同じように実習生が「イヤ」と言ったら嬉しそうに互いに「イヤ」を言い合った<sup>24</sup>。お兄さんの言葉に反応し頑張ろうとする姿があった。テレビの真似をして歌ったり踊ったりする。自分に非がある部分を抜いて保育者に伝える。自分が悪いことが分かっているにもかかわらず謝ることが出来ない<sup>25</sup>。泣いて気付いてもらうのを待っている。泣くと「ママ

がいい」になる。それぞれが一人遊びなので2歳児はおもしろいなと思った<sup>26</sup>。先生と離れたところでも子どもだけで遊んでいた<sup>27</sup>。レジごっこやままごとでお金のやり取りや「○○です、はいどうぞ」など言葉のやり取りができる。友達と一緒に遊んで「楽しかったね」と保育者が代弁していた。子どもの喧嘩を保育者がそれぞれの思いを代弁していた<sup>28</sup>。

学生は、2歳児の姿の観察記入が最も多かった。つまり2歳児が一番行動の観察がしやすく、また子どもも思いを率直に出すので子どもの気持ちを把握しやすいからであろう。しかし、2歳児の姿は、絶え間ないいざごぎの時期（下線1）であり、イヤイヤの時期（下線4・25）、こだわりが強くだだごねの時期（下線5）である。つまり言葉で言えないときは嘸みつき・だだごねとなり、言葉で言えると自己主張（下線2）言い訳（下線8）である。反面、良い悪いがわかってきて自分の行動を振り返ることが出来る姿（下線9）や、その間に挟まれ揺れ動く姿（下線8・22・25）を観察している。絵本に集中しない姿（下線11）に困りながらも、子どもの気持ちが分かって（下線12）学生が達成感を感じる場面もあった。そして友達大好きな姿（下線14）やその姿を学生は目にしながら、保育者の関りから学んでいる（下線3・6・13・17・18・19・20・22・28）。場合によっては保育者の関りから考える姿もある（下線10）。また、一人遊びを十分楽しむ姿（下線16）と、複数人でごっこ遊びをする姿（下線27）、友達を求める姿（下線15）、みんなと同じ行動をしたくない子（下線21）も観察している。それを学生は「2歳児はおもしろい」と表現している（下線26）。2歳児は前述のように、いざごぎが多く自己主張の多い時期であるが、保育者の対応から学び、子どもの自己主張を受け止めるゆとり（下線7）が子どもと笑い合え、心落ち着く関係となる。学生では入る隙間が無いほど子どもと保育者との愛着関係・信頼関係が築かれている（下線23）ことを学生は実感している。実習で学ぶ事は多いと感じた。

**3歳児・子どもの姿：**いろいろなごっこ遊びを何でも見立てて遊んでいた。友達と協力して玩具を片付ける。「オレがやる」と言って一人でやろうとする子もいる。物の取り合いでいざごぎが起き泣く。遊びに夢中でトイレに行くのを嫌がる。先生を独占したい（手を繋いでいる）、褒められたい（手伝いを全てやりたがる）、自分の意見が通らずすべて嫌になり泣き出す。4・5歳児の手伝いを振り払って4・5歳児が嫌な思いをする。逆上がりする5歳児を見て自分もやると試みたができず悲しい顔をする。豚の丸焼きをやって得意げにみせる。池の石の上の亀をみて「日向ぼっこしている」といい、自分もベンチで寝転がる。お気に入りの遊びに没頭している。嫌なことがあると泣きながらも伝えることができる。思いやりを持ち譲ることができる。一人で何でもしようとするが先生に頼ることも多い。目に入ったものごとに「なんで○○なの？」とたくさん聞いてきた。自由席の時○○ちゃんと一緒に座ると友達同士で誘い合っている。部屋のチャイムが鳴ると一人が笑い始めチャイムの真似をしてふざける。身の回りのことができるようになり自分の役割を果たそうとする。好奇心旺盛でチャレンジしようとする。給食中「おいしいね」と顔を見合わせながら共感しながら食べ

ていた。野菜の嫌いな子が食べたことがないと言って食べようとしなが「食べたらプリンセスになれる」と言われ急に食べ美味しいという。遊びを発展させて楽しむ。こだわりの強い子がいて、うさぎの椅子が無いと泣く子がいたが周りの子が気が付いて譲っていた。相手の顔を見て怒っているか気にしている子がいた。

**保育者の関わり：**自転車の台数が限られていて子どもだけで譲れないので保育者が時計を指さして順番を決めていた。友達と喧嘩したとき「〇〇したらどんな気持ち？」と保育者に問われ、自分の言葉で伝えていた。自分は一番になりたいという思いが強いため、準備ができた子から早い順と言われるとすごく急いで準備をするが、椅子をしっかりとしまっていないことを友達に指摘されると椅子をしまうために列を抜けると1番になれないため、嫌がって泣いたり友達に八つ当たりすると、保育者は「だって椅子の片付けしてないもんしょうがないよね」と言い、子どもはさらに泣いていた。

学生は3歳児の姿で、認識やその姿はたくさんとらえている。3歳児の天真爛漫な、でもシャイな面や可愛い表現・お茶目な面・おふざけの面や・所有欲や1番にこだわる面・何でも質問する面など、3歳児の姿を良く捉えている。しかし人との関わり、いざごになる理由や自分はどうしたかったのかなどの読み取りが少ない。単純に読み取れない年齢になったためである。保育者の関わりの観察も少ない。

**4歳児・子どもの姿：**折り紙製作で席にも座らずやろうとしない子がいて、しばらく見守っていると「オレできんもん」と小さな声で言う、不安があったらしい、段々楽しそうに折り始める。支援が必要な友達に優しくしている。楽しかった遊びを何度も保育者に請求して繰り返して遊ぶ。喧嘩になったとき、理由を聞いてもお互いに言い合いになって理解が難しい。自分の思いが強くいざごぎが増える。遊びに夢中になると周りが見えなくなり自己中心的になってしまうが、自分の気持ちを抑えることが出来る場合が増える。同性同士で遊ぶようになる。友達が達成するとみんなで喜べる。負けるとすごく落ち込んでしまい次をやろうとしない。ルールを確認しながらカードゲームができる。鬼ごっこをしたとき、ある鬼の子が中々タッチ出来ないと、「僕抜ける」といって止めてしまった、でもほかの子はあまり気にせず続いていた。お兄さんお姉さんの意識が芽生え下の子のお世話をしたがる。「俺の方がかっこいいのが作れる」と競う合う姿がある。ルール説明をしてもわざと守らなかつたりふざけて注目されたがる子がいる。一日の流れがわかってきて自分から動く子がいる。なんでも自分でやろうとするがうまくできずもやもやしているようにみえた。ウソをついて面白い子がいる。先生に注意されたことなどそのままそっくりまねて友達にいたりしている。トラブルがあったとき自分の思いを相手に伝えられる。〇〇ちゃん良いなと友達のことをうらやましく思う。仲の良い子と意見を同じようにしようとする。小さい子の世話をするが保育者の顔をうかがっており評価を気にしていると思った。わざと目立つために悪いことをするが注意されると認めず話を聞こうとしない。人の評価が気になる。友達が鉄棒ができると

自分もやりたくてコツコツ練習する子がいた。

**保育者の関わり：**ドッチボールを本当はしたいが、ボールを落として笑われ嫌になり砂いじりをしていて、保育者は自分で入ってくるのを待っていたがその日はやらなかった。我慢できるようになってきたが我慢しすぎる子もいて保育者は気持ちを開放するようにしていた。ブロックを取り合って保育者が時間で順番に使うように言うが聞き入れないと、他の子が同じブロックを譲っていた。

4歳児は、自己内対話の力・自己抑制の力がまだ充分育っていない時期の為、その姿が現れている。又他人の評価を気にし、自分の気持ちが出せない場面もある。その場面を保育者は的確に受け止め、子どもとの関わりを豊かにする必要があることが分かる。

**5歳児：**「〇〇ちゃん今〇〇しなきゃだめだよ」と友達同士で声を掛ける。最後まで役割をやり通そうとする。玩具の取り合いをしている子を見て「僕他にも持っているから貸してあげる」と玩具を譲る子がいた。一人の子を応援する。協力してゲームをする。相手の気持ちを考え行動ができる。集中力が増してやりたい気持ちを強く持つ。年下の子の気持ちを考え接することができる。トラブルをみんなで気持ちを伝えあい解決に導くことができる。支援児の子を考え行動したり支援したりできる。自分でやりたいと思った遊びに必要なものを自分で作って遊ぶ。自分で使うものは自分で準備する。一日の流れをはじめに伝えただけで理解し、先生に言われなくても自分たちで行動できる。クラスのみんに呼びかけて手伝ったりできる。鬼遊びの時先生が「どの鬼遊びにしようか」というと「色鬼」「氷鬼」と口々に言い、先生が「一つに決めたい」というと、自然に丸くなり、子ども同士で相談して決めていた。かけっこの練習で、負けて悔しくて泣いている子に「〇〇君は僕よりいっぱい早いよ」となぐさめていて、実習生がジーンとしてしまった。自分の思い通りにならないと活動を止める子もいるが自分で気持ちを整理してまた再開出来る子もいる。仲の良い友達の良い真似をする。こだわりが出てきて、納得がいくまで終わらないことがある（絵を描くとき）。勝ち負けの力が分かってきて「負けるからやらない」とやろうとしない。言葉使いがうまくなり表現力があがる。ごまかしや冗談がきかなくなる。小さい子の世話を自覚をもって世話をしていた。ルール遊びをたくさん行い、だんだんルールをむつかしくして挑戦していた。喧嘩したとき廊下の「話し合いの机」に行っても子どもだけで解決していた。できることが多く、できないところを隠す子がいてみていないと何で困っているのかわからない時があった。「先生あそぼう」と何人かが来るが、それぞれやりたい遊びが違うと自分たちで相談して解決していた。自分をよく見せようとして女の子は大人っぽいふるまいをする。一生懸命取り組む姿勢がある。鼓笛の練習でシンバルの4人が目を合わせて叩くタイミングを合わせていた。年少の子に「すごいね」「できたね」と先生の真似をして遊びに誘っていた。リレーでいつも負けてしまう友達のことを考えて手を抜いたりする。遊びを自分で発展させて遊ぶ。喧嘩が少ない。クラスをまとめようとする子がいる。難しい遊びも挑戦して楽しむ。他人の良い

と思ったことを真似る。鬼ごっこで捕まると「捕まっちゃった」と言って鬼になっていた。カード遊びをしていてルールを守らない子がいると全員でルールを確認して遊んでいた。リーダー的な子がいて指示している。片付けを積極的に行い自然に役割分担が決まっていた。全員が仲の良い雰囲気だった。自由遊びの時でも一人でいることが少なく集団で遊んでいる。立体的な水族館を子どもで相談しながら作っていた。

**保育者の関わり：**保育者が代弁するのではなく自分で伝えてもらって（背中を押していた）。頑張りカードで登り棒や鉄棒をやろうとせず泣いている子がいたが、毎日声をかけるとできるようになった。

学生の記録からは、保育の積み重ねで子どもたちが育っている姿が書かれている。自己コントロールの力が身に付き、話し合い、工夫し、考える姿がうかがえる。子ども同士で成長を支え合うため、保育者の姿はあまり書かれていなかったが、保育者がしっかり支えているからその子どもの姿である。保育者と子どもとの関わりをもっと観察してほしい。

## 2章 就学までに育ってほしい10の姿について——学生は「自立心」「協同性」「道徳性・規範意識の芽生え」「社会生活との関わり」の4項目をどのように理解しているか——

### 1節 「自立心」を身に付けるためにどのような保育が求められているか

- ・テーマを大きくし、様々な材料を準備して、子どもが好きな作品を作る。
- ・意欲が湧く声掛けをする。
- ・当番活動や、責任を持つ仕事（野菜の栽培や飼育）をさせる。
- ・3歳：自分で使ったものは片付ける、4歳：自分が使っても自主的に片付ける、5歳：当番制を取り入れる。
- ・出来ない時にすぐ手伝うのではなく見守る。失敗の経験をする。
- ・挑戦の機会を作る、やり遂げる環境をつくる。
- ・自分の事は自分でできるようにする。
- ・自分が体験したことや思ったことをみんなの前で発表できるようにする。
- ・行事の目標を決め、子どもが意識するようにする。
- ・片づけを子どもが工夫して出来るようにする。
- ・5歳「今何の時間かな?」「〇〇はどこに片付けるのかな」「友達は何にしているかな」と子どもが考えるようにする。
- ・生活の中で自分で出来る事をする、それが自信に繋がる。すべて援助するのではない。
- ・子どもの一人一人表現（絵・工作）を認める。
- ・結果を褒めるのではなく過程を褒める。



- ・友達が頑張っているのを見て励まされる。
- ・保育者が材料の準備など全部用意するのではなく、子どもが試行錯誤しながら考えるようにする。
- ・ご褒美にシールやメダルでやる気を起こし、達成感を味わう。
- ・手洗いや排泄など活動の区切りにクラス全体でやり出来る力を付ける。
- ・保育者が最初から正解を言わず見守る。

学生は、保育者が指示ばかり出さず、自分で考え自分で行動する事を「自立」と考えているようだ。しかし、どこまでを指示して、どこから指示しないかが難しい。放任と指示の境が分からないと言う。「今なんの時間？」と子どもに聞いて考えさせることは、真に子どもの自立とは言えないであろう。それは「今はこうあるべき」という保育者の意図を実行させることになる。学生が考えた下線部分についてはもっと考察が必要と考える。「子どもが行う目標はすべて保育者が設定し、子どもがその目標に向かいいかにやる気を起こさせるか」の考え方になっている。それでは馬の眼前にニンジンをおぼら下げ如何に頑張らせるかと同じである。目標そのものを子どもが自分で考えて持つことが、「自立心」である。「自立心」とは、自律に繋がる心情である。エリクソンは、生涯発達表に於いて、0歳から1歳半を依存しながら信頼関係を築く時期とし、1歳半から3歳を自律の時期とした。つまり、充分な人への信頼や依存を確立したうえで、つまり安全基地や安心感・満足感・支えてもらう喜びを持ったうえで、自分でやってみよう、挑戦してみようという自律心が起きるのである。人への依存や信頼感が育ち、そして認められている安心感による自己肯定感が育ったうえでの自律である。

もう一つ大切にしたいのが、自我の育ちである。自分でやりたい、自分が決めたいという自我を尊重して育てることが大切である。それがなければ「自立心」は育たない。キンダーガーデン<sup>(1)</sup>には、ただ2つの約束事があり、それは①「イヤなことはイヤと言う」②「友達がイヤと言ったら、それはできない」ことである。それだけ自我が大切にされている。ややもすると、自我が出てくる1歳半から2歳は、「イヤイヤ期」と呼ばれ子育てしにくい時期とも言われる。確かに自我が出てくると大人の思い通りには動かないので育てにくさが生じる。虐待をしてしまう時期でもある。しかし育てる大人側が、子どもの自我の成長の大切さを理解すれば、大人が譲ったり妥協したりする気持ちの余裕も生じるのではないだろうか。自我の成長は大切である。自分はこうしたい、自分はこう思う、自分の考えを形成すること無しに、「自立心」は育たない。日頃から、「あなたはどうしたいの」「あなたはこう考えているの」と投げかけられる保育が必要である。子どもがまだ小さく言葉で上手く表現できない場合は、保育者が気持ちを察し代弁する必要がある。神田<sup>(2)</sup>は、2歳児の保育でまず「分かった」と受け止める保育が大切としている。加藤<sup>(3)</sup>は、「すべてのカギは2歳児にあり」としている。強く自我を出す2歳児の時に、まず自我を出すこと、そして受け止めることの大切さを2歳児保育の重要性としている。そして受け止めた自我を子どもに切り返す、意味を付けて納得するように切り返す、第2の自我（社会的知性）を育てることが重要で、受け止めっぱなしは子どもを「我がまま」

に育て、受け止めないことは「超お利巧さん」を育てることになると言う。第2の自我が成長し、自己内対話力がついてくるのは4歳半以降としているが、まず、2歳児では芽ばえた自我を受け止め、育てることが大切である。その自我が、「私はこれがしたい」「私は嫌だ。だからこっちをしたい」という気持ちを充分出すことで、「自立」（私はこうしたい、私は嫌だ。だからこっちがしたい）の力が育まれると考える。加えて「自分の事は自分でできるようにする」であるが、これは無理にやらされてするものではなく、自分がしたいという意欲からするものである。「やって」という子どもの声にもなるべく応えたい。「やって」「見て」はそうして欲しい子どもの主体的な要求である。

## 2節 「協同性」を身に付けるためにどのような保育が求められているか

- ・ルールのある遊びをしてきまりを守る必要性が分かる。
- ・いざこぎの時、保育者が入り善悪がわかるようにする。お互いの気持ちを保育者が代弁する。
- ・みんなで協力して作る作品にする。
- ・自分たちのやりたいことを相談して決める。
- ・3歳みんなの前で褒める、4歳みんなの作品を壁面などにはる、5歳楽器踊りを練習し発表する。
- ・解決策を示さず「どうしたらいい？」とみんなに聞く。
- ・お互いの思いを出し合えるように保育者が代弁したり、受け止める力を付ける。
- ・当番を協力して行う。
- ・話し合い、意見が言える場面を作る。
- ・行事などの目標を子どもたちと一緒に考え、尊重し、自分たちでやり切った満足感を味わえるようにする。
- ・自分の意見を言ったり、相手の意見を聞けるようにする。
- ・まわりの友達の事も考えながら行動できるようにする。
- ・保育士は口出しし過ぎず見守るようにする。
- ・相手の意見を尊重し合う。
- ・目標（発表会・運動会）を作って、グループが団結できるようにする。
- ・遊びやグループ活動を通して、共感・共有・友達の意識・意見交換が出来るようにする。

学生は、協力するために協同製作や集団で行う活動をすれば「協同性」が身に付くと考えている。しかし、その為には話し合う力を身に付けることが求められる。保育者の指導無くしては話し合う力は育たない。「協同性」の基盤となる力は、「共感」する心情である。「共感」は生まれた時から育まれる。大人とミルクを飲む赤ちゃんと、目と目を合わせ、「おいしい？」「一杯飲んでね」と声を掛け、安心感の中でミルクを飲む。いないいないばーをしてきゅっきゅっ

と喜ぶ、絵本を一緒に読んで「楽しい」「面白い」と言う気持ちを共感する。子どもが指さしたものを大人と一緒にみて「ワンワンがいるね」「可愛いね」と気持ちを共感する。たっぷりと心地よさを味わう中で、一緒に見る喜び、一緒に遊ぶ楽しさを味わう。それが人と共感する力に育っていく。共感する楽しさの中でままごと遊びやごっこ遊び・集団遊びを通して、仲間のいる楽しさを感じる。「共感」の力が、仲間を信じ、助け合う力の基礎となる。そして幼児になれば言葉を介して思いを出し合い、意見を言い合う中で相手の気持ちを知り、相手の考えを知る。自己内対話の力が出来るまでは、「負けて悔しい」、「自分の思い通りにならなくて悔しい」、「1番がいい」、などの強い主張があるが、その気持ちも出しつつトラブルを経ながら自己内対話の力を育て、そして一緒に考える、良い方法を工夫する等の力が育ってくる。4歳半以降になれば自我と第2の自我が自己の中で対話できるようになり、自己内対話の力が育まれる。先にも述べたが、加藤繁美は第2の自我形成を作るはじめとなる2歳児が大切としている。自己内対話の力は、自己コントロールとか、自己抑制の力とも言われその土台は自我を大切にされる、自我を受け止められる経験をしてこそその力と言える。決して上からの圧力や指示・命令で身に付く力ではないのである。その自己内対話の力と、共感する力、自分の思いを出す力（前節で述べた「自立」の力）を基礎とし、保育者の指導、つまり、「みんなでやりとげるにはどうしたらいいか、もっと良い方法を工夫するにはどうしたらいいか」等を考える指導があって、「協同する」力が育つのである。それが「協同性」である。自分の思いを大事にされる経験が、相手の思いに耳を傾け聞き理解する力となる。汐見<sup>(4)</sup>が、講演で「保育者はブランコの時、いつも10まで数えて交代を子どもに伝えていた。しかし、ある日女の子が交代を嫌がり満足するまで乗った。すると翌日は自分から他の子に代わり優しくなった」との実践を話された。自分が大切にされている・尊重されているという安定感が人に優しくなり、人の声に耳を傾けるのである。そうしてこそ、一緒に製作したり、劇作りに取り組んだり、リレーをする中で、協同して取り組むことの素晴らしさを経験することが出来る。「協同性」の前提として相手を受け止める心の余裕が必要である。

### 3節 「道徳性・規範意識の芽生え」を身に付けるためにどのような保育が求められているか

- ・グループ活動で遊ぶ遊びをする。
- ・グループで競争する遊びをして相談したり工夫したりできるようにする。
- ・負けた時の悔しい気持ちをまわりの子どもが理解するように話す。
- ・動植物を育て、「大切」にする気持ちを育てる。
- ・玩具の取り合いになったとき、順番に使う。
- ・日常生活のルールを守る。
- ・友達の気持ちを考え自ら考えて行動する。
- ・約束を守る。
- ・共感したり、善悪の判断を付けられるようにする。

- ・絵本・紙芝居などで、して良いこと悪いことを知る。
- ・園に警察や消防署の人を呼び、防犯や防火・防震・防災・交通ルール・危険予防（不審者）を学ぶ。
- ・お互いに自分の意見を言い合える環境を作る。
- ・絵本などから、登場人物の気持ちが分かるようにする。
- ・玩具を譲り合う、貸し借りすることを覚える。
- ・ダメな事はダメとしっかり教える。

学生は、「道徳性・規範意識の芽生え」を「善悪をしっかり教える」、「ルールを守る」ことと考えている意見がある。しかし、その考えは、大人や社会に従順な国民を育てる危険性がある。乳幼児の施設でもルールや約束事が多い。「廊下は走らない」「ブランコは許可のある時」「何歳以下はジャングルジムを登らない」「給食は残さない」等それらのルールは子どもの怪我や命を守るためでもある。しかし、見方を変えれば、保育がスムーズに行われるように、管理しやすいように保育をしているとも考える。法律に反する行為は絶対にしてはいけない。しかしその法律を作るのは国民である。乳幼児の施設でも、子どもの声を聞いて、出来たら子ども達と相談してルールを作ることが出来たら良い。2節で紹介した園は、「自分の思いを言う」がただ1つの約束事である。そして何かあればその都度話し合う。例えば、滑り台の反対登りをしたとき、話し合う。反対登りをすぐ禁止するのではなく、どうしたらみんなが気持ちよく怪我なく使えるかを子どもたちと考えるのである。それが道徳性・規範意識の芽生えではないだろうか。先にルールや善悪があるのではなく、みんなにとって良いルールや善悪を考える力を育てたい。そして、2節で述べた「共感」の気持ちが他人の気持ちを知り、他人の思いを想像して思いやりを持つ力の基礎となる。「共感」力を育てることは重要である。

#### 4節 「社会生活との関わり」を身に付けるためにどのような保育が求められているか

- ・地域住民や家庭と交わる機会を設ける。
- ・地域社会に興味を持てるように、地域でとれた食べ物を食べたりする。
- ・地域や家庭の人と遊ぶ機会を作る。
- ・お世話になった人に定期的に御礼をする。老人ホームに出かける。
- ・行事に地域の人を招待し、やる気を引き出す。
- ・母の日父の日のプレゼントをする。
- ・伝承遊びをする、もちつき、焼き芋などを地域の人々で行う。
- ・挨拶する力をつける。
- ・家族が普段やっていることを子どもたちがやってみる。
- ・係りを決めて責任を持つ。
- ・自分が役に立つ喜びが感じられるように当番活動をする。

- ・地域の農産業に参加し資源の大切さを知る。
- ・家族ごっこなどのごっこ遊びをして人との関わり大切さを学ぶ。
- ・公共の施設を利用する。
- ・掃除を通して、気持ちよさを体感する。公園の清掃などをする。
- ・伝統行事など文化のすばらしさを体感する。
- ・社会の中で自分の存在を見つける。

学生は、社会生活として地域の方々の交流をメインに考えている。それも大切だが、現代は、夏は熱中症対策・交通事故や不審者・衛生面（砂場・蚊・虫さされ等）・人手不足などで、中々散歩に出たり、他施設に訪問することの制限が多いのは残念である。ある園は近くの公園すら行けないと聞く。しかし、社会生活との関わりを積極的に行っている園も多い。「どうやって鉄は出来るのか」<sup>(5)</sup>「水はどうやって水道の蛇口から出てくるのか」<sup>(6)</sup>「アホウドリに会いたい」<sup>(7)</sup>など、プロジェクト活動と言われるような取り組みである。それも常に子どもとの対話が中核となっている。そこまではいかななくても、稲作りや、小動物の飼育などの取り組みも多い。それは、一日二日の取り組みではなく、半年、1年のスパンである。そのような取り組みの中で子どもたちの社会生活との関わり力と同時に自立心や協同性も育つと考える。園から積極的に1歩外へ出ることと、日ごろから地域の人々や公共施設との連携の取り組みが必要である。

### 3章 「主体的で対話的な深い学びについて」

#### 1節 「主体的な学び」について

本来「主体的」という事は、子どもの心の内から湧いてくるものである。遊びたい、面白いという能動的な意欲を主体的と言う。しかし保育では、主体的あらしめるために如何に「動機付け」を行い「やる気」にさせるかという点に力を入れ、それが「主体的」と誤解されている点がある。「お母さんやお父さんが見に来るからすごいねと言われよう！」「それじゃ1年生になれないよ」、或いは「メダル・褒める」で、「動機付け」することが多い。早期教育を行っている横峯<sup>(8)</sup>は、子どもにやる気のスイッチを入れれば、強制しなくても子どもは自分からやるようになると言っている。その4つのスイッチは「子どもには競争心（負けたくない）がある」「真似したがる」「ちょっと難しいことに挑戦したがる」「認められたがる（だから評価をする）」である。それは、外からの動機付けであり、競争心を煽り、将来の為にひたすら頑張ることが求められている。小学校以上の教育の現場では、将来の為に今を頑張ることが求められているが、それが、だんだん低年齢化し、乳幼児期にまで降りてきた感がする。つまり早期教育は社会人として国が求める学力であり、かつ保護者が考える未来のために投資する必要性（あせり）と一致して、全国的に広がりどんどん低年齢化している。「すべて子どもは天才である」<sup>(9)</sup>という豪語は、「競争すれば、国が求める学力を開花できる」自信の現れと言ってよい。

本来主体性は楽しさであり、子どもの内から湧き上がってくる意欲であり、好奇心や興味関心である。まずは、遊びの中で主体性が十分発揮されるべきである。

## 2節 主体性を持つには

大人や保育者が子どもを育てる時、出来ない子どもに出来るように教える、しつけて身に付けさせると考えがちだが違う。その前にまず目の前の子どもが何を考え、何をしたいと思っているかを知ることが大切である。「何がしたいの」「何に興味を持っているの」と耳を傾け、子どもがしたいこと、子どもが何を思っているのかを知り、それを尊重することが大切である。しかし、子どもは自分の思いをうまく言葉では言えないので、泣くという表現や顔の表情で読み取り、またその行動の裏の本当の願いを読み取ることが大切である。友達を叩いたり追いかけたりするのは「一緒に遊びたい」という気持ちかもしれないし、わざと叱られることをするのは「もっと自分を見てほしい」というメッセージかもしれない。まず子どもの行動の奥にある子どもの本当の願いを子どもと関わる中で知ることが大切である。子どもが主体的になるとは、まさに「子どもを主体者としてとらえる」事である。「感情や行動をする主体が子どもである」という事である。それは「子どもを権利の主体者」としてとらえることである。食べる事、遊ぶ事、寝る事、気持ちを表現する事…全ての行為や言動の主体者が子どもであるという事である。それを保育者は忘れがちになる。この力を身に付けさせる。これを覚えさせる。静かに座って集中する力を身に付けさせる。楽器演奏が上手く出来るようにする。挨拶が出来るようにするために教える。悪気が無くても、「子どもを主体者」と考えず押しつけ、やらせとなることが多い。子どもが主体という視点で子どもの声を聞くと、こういう気持ちだった、こういうことに興味を持っているという事が分かる。尊重することは子どもの声を聴くことである。しかし主体性の尊重＝放任・わがままの助長ではない。その興味関心をひろげ、工夫し、探求する環境を作ることが必要となっている。レゾの保育やスウェーデンの「ドキュメンタリー保育」、ニュージーランドの「学びの物語」も出発は子どもの思いで、その子どもの思い（興味関心）をどのように保育者が気づき、それを深める環境をつくるかという事が重視されている。

第2章でも述べたように「自立心」をつけることが「主体性」を育てることであり、自我と第2の自我（社会的知性）は拮抗する形で育てる必要がある。しかし、今は、第2の自我を強調する教育が席卷している。きまりを守る、これをすると褒められる。これが出来れば優秀等、大人からの評価にさらされながらひたすら、「良い子」になるため努力し、演じている。つまり「これはいやだ」「これがしたい」という自我が封印され、自己主張が出来なくなっている教育である。そんな教育の中で、「主体的に」を求めるのは酷である。主体性を育てるにはもっと、もっと、「自我」を育てる必要があるのである。川田学は「主体性とは、『子どもが周囲とのあいだに結んでいる関係の状態』<sup>(10)</sup>と定義し、つまり、「〈してもら〉という主体の在り方に、主体性のはじまり（基盤）を位置付ける」<sup>(11)</sup>としている。主体性とはそれが受け身にみえる〈してもら〉ことを十分に経験してからこそ身に付くものではないだろうか。保育所保

育指針5領域「人間関係」の内容③に、「自分でできる事は自分です」が書かれているが、その指導がどんどん下に降り、1歳2歳にも指導している保育を目にする。自立や主体性は「自分でできる事は自分です」ことを強制したり、競争心を煽って身につくものではないのである。

内田樹の全国保育問題研究集会での講演記録<sup>(12)</sup>には、今の学校教育が目指しているのは、大学も含めて「イエスマンシップの涵養」であるとしている。教育が目指している「主体的対話的で深い学び」とは、真反対に思われる「イエスマンシップ」を育成し、自分の考えを持たない人間、道徳・社会規範を身に付け、世の中の流れに合わせる人間を育成しているとしている。例えば、学校教育ではきまりや規律がどんどん多くなってきているという。教育のスタンダード化も進められている。乳幼児期の保育は、小学校の風土に慣れるように、文字を教え、静かに集中して先生の話聞く態度を身につけようとするのは、至極当然の成り行きと考える。そこに、「自分を大切に」、「自分の思いをもっと大切にしましょう」、「やりたいことを意欲的にしましょう」という事は残念ながらなじまない。「非認知能力」<sup>(13)</sup>が重視されているが、それは「投資」に対する「効果」（いかに望ましい社会人を育てるか）の経済学的視点で考えられたものである。その能力開発（非認知能力）が人を幸せにすると錯覚されboomになったと考える。それが「主体的対話的で深い学び」である。多様化社会の中で、真に私たちが求める「保育理念」「保育方法」や「子どもの姿」の検討が必要である。保育者として何を大切にするか、それはやはり目の前の生きた子どもの「思い」を大切にするこゝである。

## おわりに

「人間関係」の授業で、学生が提出した記録から考察した。第1章からは実習などを通して、学生は子どもの姿や保育者の関りから学んでいることが多い。しかし、第2章では「主体性」・「協同性」・「道徳性・規範意識」・「社会生活」については表面的な解釈となっている。自分自身が受けてきた今までの教育で、「主体性」・「社会性」は理解しにくい、想像しにくいものであろう。しかし、厳しいながら実際に「子どもの自立」「主体性」を大切に実践している現場も多くある。現実の子どもの姿から学び、多くの実践の中から学生と一緒にさらに深い学びになるようにしたいと考える。

## 注 参考文献・参考文献

- (1) 赤木和重・岡村由紀子・金子明子・馬飼野陽美著 『どの子にもあ～楽しかった！の毎日』 ひとなる書房 2017年 p.35
- (2) 神田英雄著 『伝わる心がめばえるころ』 かもがわ出版 2005年 p.73
- (3) 加藤繫美著 『こどもと歩けばおもしろい』 ひとなる書房 2010年 p.102
- (4) 汐見稔幸 2018年11月30日 桜花学園大学 講演資料より
- (5) 鈴木秀弘等著 「火熾しから砂鉄との出会い」『響きあういのちの躍動』 ひとなる書房 2015

- 年
- (6) 佐藤朝代著 「「水のめぐり」で過ごした1年間」『生きる力を育む自然の教育』ひとなる書房 2013年
  - (7) 加藤繫美著 「アホウドリ・プロジェクト」『0～6歳 心の育ちと対話する保育の本』Gakken 2012年
  - (8) DVD 「子供をやる気にさせる4つのスイッチ」『ヨコミネ式教育白書—すべての子どもは天才である』2009年テレビ放送
  - (9) 同上
  - (10) 川田学著 「保育的発達論のはじまり」ひとなる書房 2019年 p. 38
  - (11) 同上 p. 83
  - (12) 内田樹著 「転換期にいきる力を育てる」『保育問題研究』293号 2018年 p. 28
  - (13) ジェームズ・J・ヘックマン (『幼児教育の経済学』古草秀子訳 東洋経済新報社 2015年 p. 11)

(受理日 2019年9月18日)